

双対変換とダイマー模型

QDM をゲージ理論の見方から解析する。古典的な背景場 $B(e)$ によって、

$$E(e) = \partial N(e) + B(e) \quad (1.1)$$

と表す。 $N(e)$ は整数値を固有値にもつ演算子である。 $B(e)$ は

$$\partial E(v) = \partial B(v) = \rho(v), \quad \rho = \sum v_A - \sum v_B \quad (1.2)$$

を満たす。 $B(e)$ の設定には以下のような自由度がある。

$$B(e) \rightarrow B(e) - \partial S(e), \quad N(f) \rightarrow N(f) + S(f) \quad (1.3)$$

コサイクル $\tilde{\gamma}_i$ に対し、 $(\tilde{\gamma}_i, B)$ は B の取り方によらない不変量となる。 B はサイクルではないので、 B はホモロジー類をなさないことに注意。

格子の双対変換をすると、 $\partial \leftrightarrow \tilde{\partial}$ と置き換えることができる。すると $B(e)$ はゲージ場に対応し、 $N(v)$ は物質場に対応する。また

$$\tilde{\partial} B(f) = \rho(f) \quad (1.4)$$

となり、 ρ は電荷ではなく磁束になる。

$A(e)$ と $E(e)$ の間の正準交換関係から

$$[(\partial f, A), (e, E)] = i(e, \partial f) \quad (1.5)$$

が成り立つ。 $E = \partial N + B$ を代入し、Stokes の定理を用いると

$$[(f, \tilde{\partial} A), (\tilde{\partial} e, N)] = i(f, \tilde{\partial} e) \quad (1.6)$$

となる。 B が演算子でないことに注意。よって $N(f)$ と $F(f) := \tilde{\partial} A(f)$ の間に正準交換関係

$$[F(f), N(f')] = i\delta_{f,f'} \quad (1.7)$$

が設定される。 $N(f)$ は電磁場 $F(f)$ をシフトする演算子である。

QDM のハミルトニアン

$$H = \frac{1}{2k} \left(\|E\|^2 - \frac{|\mathcal{V}|}{2} \right) + 2\bar{J} \sum_f \cos(\tilde{\partial} A(f)) + \frac{V}{2} \|\tilde{\partial} E\|^2 - \frac{V|\mathcal{V}|}{2} \quad (1.8)$$

を双対な変数 $B(e), N(f), F(f)$ で表すと、

$$H = \frac{1}{2k} \left(\|\partial N + B\|^2 - \frac{|\mathcal{V}|}{2} \right) - 2\bar{J} \sum_v \cos F(v) + \frac{V}{2} \|\partial N + B\|^2 - \frac{V|\mathcal{V}|}{2} \quad (1.9)$$

となる。ただし $\Delta = -(\partial + \tilde{\partial})^2 = -\partial\tilde{\partial} - \tilde{\partial}\partial$ である。また常に $k \rightarrow 0$ を仮定する。これらを比べると、以下のことに気づく。

- (i) 運動項とポテンシャル項が入れ替わっている。
- (ii) 変数が前者では $U(1)$ で、後者では \mathbb{Z} である。
- (iii) 前者はゲージ $U(1)$ 対称性をもつが、後者は $N \rightarrow N + n_0$ に対する対称性をもつ。

整数の自由度をもつ模型は多くの場合 discrete Gaussian (DS) 模型や Solid on Solid (SOS) 模型として議論される。例えば以下のハミルトニアンが典型的である。

$$H_c = \frac{\gamma}{2} \|\tilde{\partial} N\|^2 \quad (1.10)$$

SOS 模型は多くの場合 2 つの相をもつ。相関関数

$$g_\alpha(\mathbf{r} - \mathbf{r}') = \langle e^{i\alpha N(\mathbf{r})} e^{-i\alpha N(\mathbf{r}')} \rangle, \quad G(\mathbf{r} - \mathbf{r}') = \langle N(\mathbf{r}) - N(\mathbf{r}') \rangle \quad (1.11)$$

は $T < T_R$, $T > T_R$ においてそれぞれ以下のように振る舞う。

$$g_\alpha(R) \approx \begin{cases} M^2 + \text{const.} \times e^{-R/\xi(T)} & T < T_R \quad (\text{smooth phase}) \\ \text{const.} \times R^{-\eta(\alpha, T)} & T > T_R \quad (\text{rough phase}) \end{cases} \quad (1.12)$$

$$G(R) \approx \begin{cases} m^2 + \text{const.} \times e^{-R/\xi(T)} & T < T_R \quad (\text{smooth phase}) \\ \text{const.} \times \ln(R/a_0) & T > T_R \quad (\text{rough phase}) \end{cases} \quad (1.13)$$

量子ゆらぎを考慮に入れると状況は変わるらしい。(どう変わるの?)

以下では経路積分を使って議論する。虚時間で考えて、分配関数を以下のように Trotter 分解する。

$$Z = \lim_{N_\tau \rightarrow \infty} \text{tr} \left([e^{-\Delta_\tau H_{\text{kin}}} e^{-\Delta_\tau H_{\text{pot}}}]^{N_\tau} \right) \quad (1.14)$$

ここで $\beta = \Delta_\tau N_\tau$ とした。 H_{pot} は $|\{N\}\rangle$ について対角的な部分であり、

$$\langle \{N_j\} | e^{-\Delta_\tau H_{\text{kin}}} e^{-\Delta_\tau H_{\text{pot}}} | \{N_{j+1}\} \rangle = \langle \{N_j\} | e^{-\Delta_\tau H_{\text{kin}}} | \{N_{j+1}\} \rangle e^{-\Delta_\tau H_{\text{pot}} \{N_{j+1}\}} \quad (1.15)$$

となる。ここで、

$$H_{\text{pot}} \{N_j\} = \frac{1}{2k} \left(\|\partial N_j + B_j\|^2 - \frac{|\mathcal{V}|}{2} \right) + \frac{V}{2} \|\partial N_j + \tilde{\partial} B_j\|^2 - \frac{V|\mathcal{V}|}{2} \quad (1.16)$$

である。

一方

$$\langle \{N_j\} | e^{-\Delta_\tau H_{\text{kin}}} | \{N_{j+1}\} \rangle = \langle \{N_j\} | e^{2\Delta_\tau \bar{J} \sum_f \cos F(f)} | \{N_{j+1}\} \rangle \quad (1.17)$$

である。ここで

$$e^{z \cos p} = \sum_{l=-\infty}^{\infty} I_l(z) e^{ilp} \quad (1.18)$$

を用いる。 $I_l(z)$ はベッセル関数である。すると、

$$\begin{aligned} & \sum_{\{l(f)\}} \left(\prod_f I_{l(f)}(2\bar{J}\Delta_\tau) \right) \langle N_j | e^{i \sum_f l(f) F(f)} | N_{j+1} \rangle \\ &= \sum_{\{l\}} \left(\prod_f I_{l(f)}(2\bar{J}\Delta_\tau) \right) \langle N_j | N_{j+1} + l \rangle \\ &= \prod_f I_{N_j(f) - N_{j+1}(f)}(2\bar{J}\Delta_\tau) \end{aligned} \quad (1.19)$$

となる。

$$I_l(z) = \frac{1}{\sqrt{2\pi}} e^z e^{-l^2/2z} (1 + \mathcal{O}(z^{-1})) \quad (1.20)$$

を代入すると、

$$\prod_f I_{N_j(f)-N_{j+1}(f)}(2\bar{J}\Delta_\tau) \propto \exp\left(\frac{1}{4\bar{J}\Delta_\tau} \sum_j \|N_{j+1} - N_j\|^2\right) \quad (1.21)$$

となる。よって分配関数を経路積分によって

$$Z = \lim_{\Delta_\tau \rightarrow 0} \sum_{\{N\}} e^{-S\{N\}} \quad (1.22)$$

としたときの作用が

$$\begin{aligned} S\{N\} &= \frac{\Delta_\tau}{4\bar{J}} \sum_j \|\partial_0 N_j\|^2 \\ &\quad + \frac{\Delta_\tau}{2k} \sum_j \left(\|\partial N_j + B_j\|^2 - \frac{|V|}{2} \right) \\ &\quad + \frac{V\Delta_\tau}{2} \sum_j \|\Delta N_j + \tilde{\partial} B_j\|^2 \end{aligned} \quad (1.23)$$

と求まる。ここで $\partial_0 N_j := (N_{j+1} - N_j)/\Delta_\tau$ である。

量子ダイマー模型とモノポール気体

Poisson 和公式

$$\sum_{n=-\infty}^{+\infty} f(n) = \sum_{m=-\infty}^{+\infty} \int d\phi e^{2\pi i m \phi} f(\phi) \quad (2.1)$$

によって、整数の変数 $N(v)$ を実数 $\phi(v)$ と整数 $m(v)$ に置き換えられる。すると

$$\begin{aligned} Z &= \sum_{\{m\}} \int \mathcal{D}\phi \exp(2\pi i(m, \phi) - S[\phi]) \\ &= \sum_{\{m\}} \int \mathcal{D}\phi \exp(-S_B[\mathbf{B}] - S_\phi[\phi] - S_{\text{int}}[\phi, m, \mathbf{B}]) \end{aligned} \quad (2.2)$$

と表せる。ここで、

$$S_\phi[\phi] = \Delta_\tau \sum_x \left(\frac{1}{4J} (\partial_0 \phi(x))^2 + \frac{1}{2k} (\partial \phi(x))^2 + \frac{V}{2} (\Delta \phi(x))^2 \right) \quad (2.3)$$

$$S_{\text{int}}[\phi, m, B] = \Delta_\tau \sum_x \phi(x) \left(\frac{2\pi i}{\Delta_\tau} m(x) + \frac{1}{k} \tilde{\partial} B(x) - V \Delta \tilde{\partial} B(x) \right) \quad (2.4)$$

である。ただし $x = (x^0, \mathbf{x})$ とし、 $x^0 = j\Delta_\tau$, $j = 1, \dots, N_\tau$ である。また \mathbf{x} は双対な正方格子の格子点を表すベクトルである。

作用は ϕ について 2 次形式になっているので、 ϕ を integrate out することができる。
まず、

$$S_\phi[\phi] = -\frac{\Delta\tau}{2} \sum_x \phi(x) \left(\frac{1}{2\bar{J}} \partial_0^2 + \frac{1}{k} \Delta - V \Delta^2 \right) \phi(x) \quad (2.5)$$

と表す。Green 関数 $G_0(x - x')$ は以下のように定義される。

$$-\left(\frac{1}{2\bar{J}} \partial_0^2 + \frac{1}{k} \Delta - V \Delta^2 \right) G_0(x - x') = \delta_{x, x'} \quad (2.6)$$

連続極限をとって、 Δ^2 の寄与を無視すると、Green 関数は以下のように計算できる。

$$\begin{aligned} G_0(x) &\approx \int \frac{d^3q}{(2\pi)^3} \frac{e^{iq \cdot x}}{q_0^2/2\bar{J} + (q_1^2 + q_2^2)/k} \\ &= \frac{\sqrt{2\bar{J}k}}{4\pi} \int \frac{d^3q}{(2\pi)^3} \frac{e^{i\sqrt{2\bar{J}k}q_0x^0 + i\sqrt{k}\mathbf{q} \cdot \mathbf{x}}}{q^2} \\ &= \frac{k/4\pi}{\sqrt{x_0^2 + (k/2\bar{J})\mathbf{x}^2}} \end{aligned} \quad (2.7)$$

ϕ を integrate out すると、分配関数は

$$Z \propto Z_{\text{CG}} = \sum_{\{m\}} \exp \left(-\frac{1}{2} \sum_{x,x'} m(x) V_{\text{eff}}(x-x') m(x') + 2\pi i \sum_x m(x) \Psi(x) \right) \quad (2.8)$$

となる。ここで

$$V_{\text{eff}}(x) = \frac{4\pi^2}{\Delta_\tau} G_0(x) \approx \frac{\pi k / \Delta_\tau}{\sqrt{(x^0)^2 + (k/2\bar{J})x^2}} \quad (2.9)$$

$$\Psi(x) = \sum_{x'} G_0(x-x') \left(\frac{1}{k} \tilde{\partial} B(x') - V \Delta \tilde{\partial} B(x') \right) \quad (2.10)$$

である。

次に $m(x)$ を integrate out する。モノポールが希薄であると仮定して $m(x) = 0, \pm 1$ のみを考える。さらに作用に

$$S_{\text{core}} = u \sum_x m(x)^2 \quad (2.11)$$

を加える。 m に関して和をとると、

$$\prod_x \sum_{m(x)=0,\pm 1} e^{um(x)^2 + 2\pi i m(x)\phi(x)} = \prod_x (1 + z \cos(2\pi\phi(x))) \quad (2.12)$$

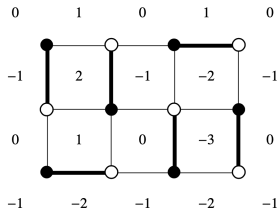
となる。ここでモノポールのフガシティを $z = e^{-2u}$ とおいた。ここから、背景磁束 B を無視すれば、有効理論の作用は sine-Gordon 模型

$$S = \int d^D x \left[\frac{K}{2} \partial_\mu \phi \partial^\mu \phi - g \cos(2\pi\phi) \right] \quad (2.13)$$

になると推察できる。

量子 Lifshitz 模型

これからやりたいのは RK point の有効理論を調べることである。RK point の基底状態は古典ダイマー模型にマップできたので、まず古典ダイマー模型を見直すところから始める。ダイマー配位について高さ関数を定める。



これは以下のように決める。

- ・ 白を右に見て占有されている辺を横切ると高さは $+3$
- ・ 白を右に見て占有されていない横切ると高さは -1

ここで一つの白い頂点に対し、そのまわりの高さの平均は以下ようになる。

$\begin{array}{c c} 0 & 3 \\ \hline 1 & 2 \end{array}$	$\begin{array}{c c} 0 & -1 \\ \hline 1 & 2 \end{array}$	$\begin{array}{c c} 0 & -1 \\ \hline 1 & -2 \end{array}$	$\begin{array}{c c} 0 & -1 \\ \hline -3 & -2 \end{array}$
$h = \frac{3}{2}$	$h = \frac{1}{2}$	$h = -\frac{1}{2}$	$h = -\frac{3}{2}$

h の原点をずらすと、これらが $h = 0, 1, 2, 3$ に対応するようにできる。

高さ関数をコンパクト化して角度変数 φ を $\varphi = (\pi/2)h$ と定義する。ダイマーの密度と φ の対応は以下のようにして得られる。

$$n_x = \frac{1}{4} + \frac{1}{2\pi} (-1)^{x+y} \partial_y \varphi = (-1)^x \cos \varphi \quad (3.1)$$

$$n_y = \frac{1}{4} + \frac{1}{2\pi} (-1)^{x+y+1} \partial_x \varphi = -(-1)^y \sin \varphi \quad (3.2)$$

(Fradkin はこれらを足してしまっているが、怪しい。)

$\varphi(\mathbf{x})$ に対する有効理論は free boson であり、作用は

$$S[\varphi] = \int d^2x \frac{K}{2} (\nabla \varphi(\mathbf{x}))^2 \quad (3.3)$$

である。free boson に対して以下の演算子を考える。

$$V_n(\mathbf{x}) = e^{in\varphi(\mathbf{x})}, \quad \tilde{V}_m(\mathbf{x}) = e^{im\vartheta(\mathbf{x})} \quad (3.4)$$

ただし ϑ は Cauchy-Riemann の関係式によって

$$\partial_i \vartheta = \varepsilon_{ij} \partial_j \varphi \quad (3.5)$$

と定める。charge-density wave は $V_1(\mathbf{x})$ に対応づけられ、 $1, i, -1, -i$ の値を取る。
columnar order parameter は $V_2(\mathbf{x})$ に対応づけられ、 ± 1 の値を取る。

厳密解によって、ダイマー密度の相関関数のべき依存性は $1/|\mathbf{x} - \mathbf{y}|^2$ となることが知られている。vertex operator の相関関数

$$\langle V_1(\mathbf{x}) V_{-1}(\mathbf{y}) \rangle = \frac{1}{|\mathbf{x} - \mathbf{y}|^{2\Delta_1}}, \quad \Delta_1 = \frac{1}{4\pi K} \quad (3.6)$$

と比較すると、自由なダイマー模型に対応する点として $K_{\text{free}} = 1/4\pi$ を得る。

量子論に戻る。 $\varphi(\boldsymbol{x})$, $\Pi(\boldsymbol{x})$ を正準共役な変数とする:

$$[\varphi(\boldsymbol{x}), \Pi(\boldsymbol{y})] = i\delta^2(\boldsymbol{x} - \boldsymbol{y}) \quad (3.7)$$

QDM の有効理論のハミルトニアンとして、

$$H_0 = \int d^2x \left[\frac{1}{2} \Pi(\boldsymbol{x})^2 + \frac{A}{2} (\nabla \varphi(\boldsymbol{x}))^2 + \frac{\kappa^2}{2} (\nabla^2 \varphi(\boldsymbol{x}))^2 \right] \quad (3.8)$$

を考えよう。

1. $A > 0$ のときは秩序相に対応する。
2. $A = 0$ のときは量子臨界点に対応する。

それぞれについて見ていく。

まず $A > 0$ のとき、 $[T] = [L]$ である。ハミルトニアンを作用に直すと

$$S_0 = \int d^2x d\tau \left[\frac{1}{2} (\partial_\tau \varphi(\mathbf{x}))^2 + \frac{A}{2} (\nabla \varphi(\mathbf{x}))^2 + \frac{\kappa^2}{2} (\nabla^2 \varphi(\mathbf{x}))^2 \right] \quad (3.9)$$

である。次元解析すると $[\varphi] = [L^{-1/2}]$ であり、 $[(\nabla^2 \varphi)^2] = [L^{-5}]$ は irrelevant である。高さ関数の周期性から、この作用に

$$S_{\text{int}} = \int d^2x d\tau g \cos(4\varphi) \quad (3.10)$$

という項を追加する。 S_{int} は $A > 0$ のとき relevant であり、作用に含める必要がある。くりこみによって g が大きくなるため、 $A > 0$ の相は g の強結合相によって記述される。有効理論の作用は

$$S_{\text{eff}} = \int d^2x d\tau \left[\frac{1}{2} (\partial_\tau \varphi(\mathbf{x}))^2 + \frac{1}{2} (\nabla \varphi(\mathbf{x}))^2 + \frac{g}{\sqrt{A}} \cos(4\varphi(\mathbf{x})) \right] \quad (3.11)$$

である。ただし $\tau \rightarrow \tau/\sqrt{A}$, $\mathbf{x} \rightarrow \sqrt{A}\mathbf{x}$ のようにスケールを取り直した。このとき φ は $\cos(4\varphi)$ の底の 1 つにあり、 φ の揺らぎは gapped となって質量 $m_{\text{eff}}^2 \approx 16g/\sqrt{A}$ をもつ。この相は colomner order をもつ。

次に $A = 0$ の場合を考える。この場合の作用は

$$S_{\text{QLM}} = \int d^2x d\tau \left[\frac{1}{2} (\partial_\tau \varphi)^2 + \frac{\kappa^2}{2} (\nabla^2 \varphi)^2 \right] \quad (3.12)$$

であり、これを量子 Lifshitz 模型と呼ぶことにする。次元解析をすると $[T] = [L^2]$ であり、 $[\varphi] = [1]$ である。摂動として、 S_{int} の他に marginal な項

$$S_4 = \int d^2x d\tau g_4 (\nabla \varphi)^4 \quad (3.13)$$

を考えることができる。これは marginally irrelevant ではあるが、 $A < 0$ の場合に秩序相を安定化する。古典的に安定な φ の配位が $\nabla \varphi = \mathbf{Q}$ のようにシフトするので、

$$\varphi(\mathbf{x}) = \mathbf{Q} \cdot \mathbf{x} \quad (3.14)$$

となる。 \mathbf{Q} は columnar state の傾きを表している。 $S_{\text{QLM}} + S_4 + S_{\text{int}}$ を最小化するように \mathbf{Q} を決定すると

$$|\mathbf{Q}| = \sqrt{\frac{|A|}{4g_4}} \quad (3.15)$$

となる。

摂動を加えない場合はくりこみに対して不安定であるが、この場合は臨界点として重要である。量子 Lifshitz 模型のハミルトニアンをゲージ理論の言葉で表現すると、

$$H_{\text{QLM-gauge}} = \frac{\kappa^2}{2} \|\tilde{\partial} E\|^2 + \frac{1}{2} \|\tilde{\partial} A\|^2 = \int \left(\frac{\kappa^2}{2} dE \wedge \star dE + \frac{1}{2} dA \wedge \star dA \right) \quad (3.16)$$

となる。 E, A は正準交換関係 $[E(e), A(e')] = i(e, e')$ を満たし、状態はゲージ不変性 $\partial E(v)|\text{Phys}\rangle = 0$ を満たすとする。ここで双対な理論に移り、 $\partial \leftrightarrow \tilde{\partial}$ とする。

$$E(e) = \tilde{\partial} \varphi(e), \quad \Pi(v) = \partial A(v) \quad (3.17)$$

とすると、ゲージ不変性 $\tilde{\partial} E = 0$ は直ちに成り立つ。また $\varphi(v), \Pi(v)$ の間の交換関係は

$$[\varphi(v), \Pi(v')] = i(v, v') \quad (3.18)$$

となる。ハミルトニアンを φ, Π を使って表示すると、

$$H_{\text{QLM-gauge}} = \frac{1}{2} \|\Pi\|^2 + \frac{\kappa^2}{2} \|\Delta \varphi\|^2 = \int \left(\frac{1}{2} \Pi \wedge \star \Pi + \frac{\kappa^2}{2} \Delta \varphi \wedge \star \Delta \varphi \right) \quad (3.19)$$

である。

電荷演算子は

$$O_n(v) = e^{in(\gamma_v, E)} = e^{i(\partial\gamma_v, \varphi)} = e^{in\varphi(v)} \quad (3.20)$$

である。磁荷演算子は

$$e^{im(\tilde{\gamma}_v, A)} \quad (3.21)$$

である。磁荷があるときのゲージ不変性は $\tilde{\partial}E = mv$ であり、

$$E = \tilde{\partial}\varphi + \mathcal{B}, \quad \tilde{\partial}\mathcal{B} = mv \quad (3.22)$$

と表せる。するとハミルトニアンは

$$H_{\text{QLM-gauge}} = \frac{1}{2} \|II\|^2 + \frac{\kappa^2}{2} \|\Delta\varphi + \partial\mathcal{B}\|^2 \quad (3.23)$$

となる。

ここで Schrödinger 汎関数 $\Psi[\varphi] := \langle [\varphi] | \Psi \rangle$ を用いて考える。ハミルトニアンのは作用は

$$\begin{aligned} H\Psi[\varphi] &= \int d^2x \left[-\frac{1}{2} \frac{\delta^2}{\delta\varphi(\mathbf{x})^2} + \frac{\kappa^2}{2} (\nabla^2\varphi(\mathbf{x}))^2 \right] \Psi[\varphi] = E\Psi[\varphi] \\ &= \int d^2x \frac{1}{2} \{Q[\varphi], Q^\dagger[\varphi]\} \Psi[\varphi] \end{aligned} \quad (3.24)$$

と書ける。ただし $Q^\dagger[\varphi], Q[\varphi]$ は生成消滅演算子であり、

$$Q[\varphi] = \frac{1}{\sqrt{2}} \left[-\frac{\delta}{\delta\varphi(\mathbf{x})} + \kappa \nabla^2\varphi(\mathbf{x}) \right] \quad (3.25)$$

と定義される。基底状態は、汎関数微分方程式 $Q\Psi_0[\varphi] = 0$ を解くことで

$$\Psi_0[\varphi] = \frac{1}{\sqrt{Z_0}} \exp \left(- \int d^2x \frac{\kappa}{2} (\nabla\varphi(\mathbf{x}))^2 \right) \quad (3.26)$$

と求まる。ただし、

$$Z_0 = \int \mathcal{D}\varphi \exp \left(- \int d^2x \kappa (\nabla\varphi(\mathbf{x}))^2 \right) \quad (3.27)$$

である。これは $K = 2\kappa$ の free boson の分配関数になっている。

電荷演算子の相関関数は

$$\langle \Psi_0 | O_{n_1}(\mathbf{x}_1) \cdots O_{n_N}(\mathbf{x}_N) | \Psi_0 \rangle = \langle V_{n_1}(\mathbf{x}_1) \cdots V_{n_N}(\mathbf{x}_N) \rangle_{\text{free boson}} \quad (3.28)$$

となって、 $K = 2\kappa$ の free boson における vertex operator の相関関数に帰着する。
vertex operator の OPE は

$$V_{n_1}(\mathbf{x}_1) V_{n_2}(\mathbf{x}_2) \sim |\mathbf{x}_1 - \mathbf{x}_2|^{n_1 n_2 / 4\pi\kappa} V_{n_1+n_2}(\mathbf{x}_2) + \cdots \quad (3.29)$$

であるから、これを繰り返し適用していけば相関関数は求まる。特に、

$$\langle V_{-n}(\mathbf{x}_1) V_n(\mathbf{x}_2) \rangle = |\mathbf{x}_1 - \mathbf{x}_2|^{-n^2 / 4\pi\kappa} \quad (3.30)$$

であるから、電荷演算子 O_n のスケーリング次元が

$$\Delta_n = n^2 8\pi\kappa \quad (3.31)$$

となることが分かる。

次に磁荷演算子について考える。これは

$$\tilde{O}_m(f) = e^{2\pi i m(\tilde{\gamma}_f, A)} = e^{2\pi i(\alpha_f, \Pi)} \quad (3.32)$$

と表される。ただし、

$$\tilde{\partial}\tilde{\gamma}_f = f, \quad \tilde{\partial}\alpha_v = m\tilde{\gamma}_v \quad (3.33)$$

である。よって α_v は $\tilde{\partial}^2\alpha_v = mv$ の解である。連続の言葉で書くと

$$d^2\alpha_x(\mathbf{y}) = m\delta^2(\mathbf{x} - \mathbf{y}), \quad (3.34)$$

となる。一見すると左辺は 0 になるが、 $e^{2\pi i\alpha_x}$ が一価になることのみを要請すれば、

$$\alpha_x(\mathbf{y}) = m \arg(\mathbf{y} - \mathbf{x}) \quad (3.35)$$

という解がある。 Π は φ に共役な演算子だったので、磁荷演算子は

$$\tilde{O}_m(\mathbf{x})|[\varphi]\rangle = |[\varphi - \alpha_x]\rangle \quad (3.36)$$

という作用になっている。これは特異ゲージ変換とみなせる。

磁荷がある場合の Schrödinger 汎関数は、

$$\Psi_{m,\mathbf{x}}[\varphi] = \langle [\varphi] | \tilde{O}_m(\mathbf{x}) | \Psi_0 \rangle = \frac{1}{\sqrt{Z_0}} \exp \left(-\frac{\kappa}{2} \|\tilde{\partial}\varphi - m\tilde{\gamma}_{\mathbf{x}}\|^2 \right) \quad (3.37)$$

となる。すると、 $\tilde{\gamma}_{\mathbf{x}}$ がゲージ場に見えてくる。磁荷演算子の相関関数は

$$\langle \Psi_0 | \tilde{O}_{m_1}(\mathbf{x}) \cdots \tilde{O}_{m_M}(\mathbf{x}_M) | \Psi_0 \rangle = \frac{1}{Z_0} \int \mathcal{D}\varphi \exp \left(-\kappa \int d^2\mathbf{x} (\nabla\varphi - \mathbf{A})^2 \right) \quad (3.38)$$

となる。ここでベクトルポテンシャル \mathbf{A} は

$$\nabla \times \mathbf{A}(\mathbf{x}) = 2\pi \sum_{l=1}^M m_l \delta^2(\mathbf{x} - \mathbf{x}_l) \quad (3.39)$$

を満たす。磁荷演算子のスケーリング次元を求めるためには、シリンダー時空において、compactified free boson の巻きつき数 m の基底状態のエネルギーを求めればよい。詳細は省くが¹

$$\tilde{\Delta}_m = 2\pi\kappa m^2 \quad (3.40)$$

となる。

¹Yellow book (6.94) で $n=0, g=2\kappa$ とすると、 $\tilde{\Delta}_m = (L_0 + \bar{L}_0)|0\rangle$ から求まる。

Green 関数は

$$G(\mathbf{x} - \mathbf{x}', \tau - \tau') = \langle \varphi(\mathbf{x}, \tau) \varphi(\mathbf{x}', \tau') \rangle = \int \frac{d\omega}{2\pi} \int \frac{d^2 \mathbf{q}}{(2\pi)^2} \frac{e^{i\omega(\tau - \tau') - i\mathbf{q} \cdot (\mathbf{x} - \mathbf{x}')}}{\omega^2 + \kappa^2 (\mathbf{q}^2)^2} \quad (3.41)$$

となる。これを正則化して、

$$G_{\text{reg}}(\mathbf{x}, \tau) := G(\mathbf{x}, \tau) - G(\mathbf{a}, 0) := -\frac{1}{8\pi\kappa} \left[\ln \left(\frac{\mathbf{x}^2}{a^2} \right) + \Gamma \left(0, \frac{\mathbf{x}^2}{4\kappa|\tau|} \right) \right] \quad (3.42)$$

とする。(確かめてない。) $\Gamma(0, z)$ は

$$\Gamma(0, z) = \int_z^\infty \frac{ds}{s} e^{-s} \quad (3.43)$$

と定義される。漸近的な振る舞いは

$$G_{\text{reg}}(\mathbf{x}, \tau) = \begin{cases} -(1/4\pi\kappa) \ln(|\mathbf{x}|/a) & |t| \rightarrow 0 \\ -(1/8\pi\kappa) \ln(4\kappa|\tau|/a^2\gamma) & |\mathbf{x}| \rightarrow a \end{cases} \quad (3.44)$$

となる。ここで $\ln \gamma = 0.577$ は Euler 定数。

vertex operator が正確には正規積をとったものであることに注意すると、Wick の定理から

$$\langle O_n(\mathbf{x}, \tau)^\dagger O_n(\mathbf{x}', \tau') \rangle = e^{n^2 G_{\text{reg}}(\mathbf{x} - \mathbf{x}', \tau - \tau')} \quad (3.45)$$

が成り立つ。よって、 $|\tau - \tau'| \rightarrow 0$ のとき

$$\langle O_n(\mathbf{x}, 0)^\dagger O_n(\mathbf{x}', 0) \rangle = \left(\frac{a}{|\mathbf{x} - \mathbf{x}'|} \right)^{n^2/(4\pi\kappa)} \quad (3.46)$$

となる。また $|\mathbf{x} - \mathbf{x}'| \rightarrow a$ のとき

$$\langle O_n(\mathbf{0}, \tau)^\dagger O_n(\mathbf{0}, \tau') \rangle = \left(\frac{a^2 \gamma}{4\kappa |\tau - \tau'|} \right)^{n^2/(8\pi\kappa)} \quad (3.47)$$

となる。